

日本経済学会 2007 年度春季大会報告論文  
(6月3日午後の部「産学共同・学術研究の経済分析」)

## 中小企業による産学連携相手の選択と連携成果

2007 年 5 月

岡室 博之 (一橋大学)

okamuro@econ.hit-u.ac.jp

### 要旨

中小企業の産学連携への取り組みが近年大きく増加し、注目を集めている。これまでの実証研究は、どのような企業が産学連携を行うのか、また産学連携が企業の成果にどのように影響するのかを検証しているが、本稿は連携相手の選択に注目し、その要因と効果を計量的に分析する。分析対象は、アンケート調査の回答企業のうち、過去3年間に産学連携に取り組んだ製造業の中小企業約400社である。連携の成果は、所期の目的がどの程度達成されたか(5段階評価)という指標によって測定される。連携相手の選択に関する変数は、相手機関の類型(国立大学等)、相手機関との距離、そして相手機関の探索方法(どのようにして相手を見つけたか)である。

分析の結果、第一に、連携の成果が連携相手の選択および連携の内容と目的に影響されること、特に、国立研究機関との連携、遠隔地の機関との連携、学会等を通じた連携相手の探索が、連携の成果に対して有意な正の効果を持つことが明らかになった。第二に、連携相手の選択は、何を被説明変数にするかによって結果は異なるが、企業と経営者の属性に有意に影響されることが検証された。特に、研究開発への取り組みと社長の学歴(大学院修了、理系出身)が、遠隔地の機関との連携および学会等による連携相手の探索を促進することは、連携相手の探索費用という観点から説明できる。この結果は、大学側の情報公開や中小企業との情報交流の一層の促進を通じて中小企業における連携相手の探索費用を下げることで、産学連携の成果を高めるために重要であるということを示唆している。以上の結果を総合すると、企業と経営者の属性は連携の成果に直接には影響しないが、連携相手の選択に関する意思決定を通じて間接的に影響すると言える。

キーワード：産学連携、共同研究、中小企業、探索費用

JEL 分類コード：L24, O32